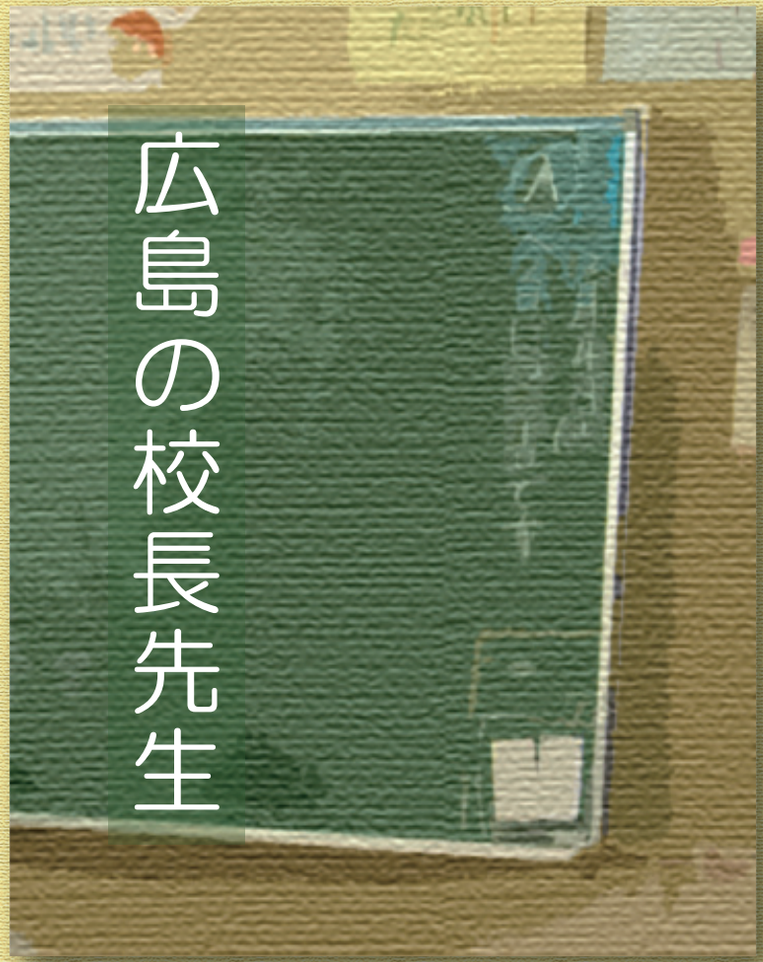

広島の校長先生

長尾　眞文　/　「広島の校長先生」編集委員会　共編

一般財団法人 国際開発センター

International Development Center of Japan

IDCJ

広島の校長先生

長尾　眞文

「広島の校長先生」編集委員会　共編

IDCJ

広島の校長先生

長尾 眞文 / 「広島の校長先生」編集委員会　共編

一般財団法人 国際開発センター

International Development Center of Japan

広島の校長先生

長尾　眞文
「広島の校長先生」編集委員会　共編

IDCJ

広島の教育者と発展途上国の教育者、
教員を志す学生たちに本書を捧げます。

長 尾 眞 文（広島大学名誉教授・国際開発センター研究顧問）
「広島の校長先生」編集委員会
共 編

「広島の校長先生」編集委員会
代表：　佐藤（赤木）由佳
メンバー：　松野（西住）有紀子
有薗（井上）奈津子
世良（岡田）杏奈
山本（松澤）友里
装幀：　阪井　香月

『広島の校長先生』は 2006 年度に広島大学教育開発国際協力研究センターが実施した「広島の校長先生」プロジェクトの成果として 2007 年 2 月に同センターより出版されました。この度この本の版権を譲渡された一般財団法人国際開発センターが英訳版をオープン・ソースでオンライン出版するのにあわせて日本語オリジナル版もオンライン提供することとしました。内容的な変更は一切加えておらず、執筆者をはじめ文中の人物の名前、所属等もオリジナル出版時の記載のままです。

この本の当初の出版には広島大学同窓会のドリームチャレンジ賞の助成を受けました。ここに記して謝意を表します。

まえがき

本書は広島大学の教育学部・教育学研究科の学生の皆さんが広島県の著名で有力な校長先生の教育観、人生観についてインタビューし、まとめたユニークな試みの成果であります。学生の皆さんは大学院で修士論文を執筆したり、すでに卒業し教員として活躍したりしていますが、そのプロジェクトは彼らにとって忘れ得ない大きな挑戦であり、彼らの人生に大きく影響するものであることを確信しています。そうしたプロジェクトを指導されたＣＩＣＥの長尾教授にも深甚の敬意を表するものであります。こうした試みこそが、これからの大学教育が目指すべきものを示唆しているものと思い、私たちも大いに勉強させられる試みであると思っております。

今日の大学生は意欲がない。基礎的力が不足している。学力が低下している。こうした現代学生批判が続出しており、広島大学においても例外ではない。しかしこのプロジェクトの成果をご覧いただければ、そうした批判が当たらないことをご理解いただけるものと思います。大学が必要とする力はまさにこうした企画し、実施し、調査研究の成果を分析し、報告するといったコンピテンシーではないのだろうか。問題を見つけ、プロジェクト化し、それを実行する。そうしたたくましい、知的で意欲的な活動力。これこそ大学が育成したいと思っていた力ではないのか。国語力、英語力、主体的に考える力、実行する力、そして大学で習得した教育学の専門的知識・技能などがすべて投入された成果がこれであると言っても過言ではない。素晴らしい学生たちではないでしょうか。

さてこの資料はアフリカなどの発展途上国の教育者や教育行政者が日本の経験から学ぶ時の最も興味深いドキュ

メントでもあったようです。そのことはまた比較・国際教育学的にもきわめて貴重な資料であるといえます。アフリカの教育関係者が日本の校長先生のお話や説明のどこに興味を示したり、疑問を感じたり、もっと知りたいと思ったり、あるいは何ら反応を示さなかったりしたのか。そのことが何を意味するのか。この貴重なドキュメントをじっくりと分析するだけでも、興味深い知見を提供してくれるようである。同時に日本の校長先生方がそうした質問にどのように回答されたかを見ることだけでも、日本の学校の特色や思い入れを感じることができますので、その意味でも大変興味深いドキュメントであるとも言えます。

ここに登壇いただいた校長先生方は実名・履歴つきでしかも写真入り、という条件で執筆・対談いただいたようであります。まずもって責任ある発言に敬意を表するとともにその誠実な対応に心より感謝申し上げます。それぞれの校長先生のご発言には多くを学ぶことができ、学生が校長先生から何を学んだかもコメントして記されています。私の友人も含まれていますが、協力していただき誠にありがとうございました。広島県の学校教育が再び力強い歩みを進めることを確信させる立派な校長先生方のご発言ですので、私たちもこうした勇気ある発言からしっかりと学んでいきたいと思います。

最後に本書の出版までこぎつけた学生諸君の不断の努力、あきらめないで最後までやり遂げるという強靭な意志にこころより敬意を表します。

二〇〇七年一月

広島大学副学長（国際担当）・教育開発国際協力研究センター長・比較国際教育学教授　二宮　皓

謝　辞

本書の出版にあたっては、原稿を執筆していただいた十三名の校長先生（生田一人先生、石田俊夫先生、内田信正先生、尾田由紀子先生、瀬崎宣利先生、田邊康嗣先生、花咲法子先生、林保先生、番本正和先生、平賀正幸先生、前原敏雄先生、安森譲先生、了安峻先生）をはじめ、学校訪問で出会った学校関係者の方々、ジョナサン・Ｄ・ヤンセン先生（南アフリカ共和国プレトリア大学教育学部長）、プロジェクト顧問の玉川栄伸先生（元加計高校長）、広島大学教育開発国際協力研究センター（ＣＩＣＥ）の関係者の方々等、多くの方にご協力をいただきました。深く感謝いたします。

目　次

まえがき　二宮　皓

謝　辞

「広島の校長先生」プロジェクト　長尾　眞文

小学校 ――――――――

ここでなければ ここでしかできない教育を追い求めて　生田　一人

対　話　「生田先生と南アフリカ共和国研修員との対話から」

心に生きつづける教職の道 ― へき地教育に夢をかけて ―　尾田　由紀子

コメント　「へき地教育のすばらしさ」

小学校教職の道一筋　花咲　法子

コメント　「教職への道端で出会った〝花〟咲先生」

中学校

夢とロマンを求めて　林　保　67
コメント　「教育は人なり」

学校の組織づくりと人材育成　平賀　正幸　83
コメント　「平賀先生にお会いして」
コメント　「平賀先生とヤンセン先生との出会い」　ジョナサン・D・ヤンセン

つれづれなるままに　前原　敏雄　103
コメント　「生徒の心を動かすもの」

民間出身校長の五年間　了安　峻　127
コメント　「教育現場のすばらしさ」

高　校

校長になった化学の先生　石田　俊夫　149
対　話　「石田先生と南アフリカ共和国研修員との対話から」

教育激動の時代を生きる――「一所懸命」に支えられて――　内田　信正　167
対　話　「内田先生と南アフリカ共和国研修員との対話から」
生き甲斐のある教師人生　瀬崎　宣利　187
対　話　「瀬崎先生と南アフリカ共和国研修員との対話から」
一燈を提げて暗夜を行く　田邊　康嗣　207
コメント　「強さの基盤にあるもの」
教育に対する基本姿勢と理科教師・管理職としての歩み　番本　正和　225
対　話　「番本先生と南アフリカ共和国研修員との対話から」
社会の至宝の育成と学校経営ビジョン　安森　譲　249
コメント　「子どもは社会の宝」
『飛んでみる勇気』　「広島の校長先生」編集委員会　269

「広島の校長先生」プロジェクト

長尾　眞文

「広島の校長先生」プロジェクトは、広島大学教育開発国際協力研究センターの教官と数名の学生から成るグループが、広島県の十三名の校長先生および校長経験者との対話を通して、日本の学校教育に携わる教育者の人生観、職業観、教育観を先生方の言葉でまとめるために実施した活動です。このプロジェクトには、ふたつの大きな目的がありました。ひとつは、教育開発の遅れている発展途上国から研修のために来日する教員や教育行政官が、日本の教育経験について学習する際の参考資料を提供すること。もうひとつは、教職を志望する学生に、先達の教育者の教員人生について知るための材料を作成することでした。なぜそのような目的の異なる活動をひとつのプロジェクトに合体して実施することになったか、その経緯について説明するとともに、このプロジェクトを通してどのような成果を期待しているのかについて書きたいと思います。

広島大学教育開発国際協力研究センター（以下では「センター」と呼ぶことにします）は、研究と研修を通して発展途上国の教育開発を支援する研究組織です。このセンターでは、毎年発展途上国の教員や教育行政担当者の方々二十―三十名を短期研修員として受け入れ、日本の教育政策、教育制度、学校経営、現職教員研修の経験について学んでいただく事業を行っています。経済社会開発の遅れから人づくりを急務の課題としている国々に対して日本が提供している教育協力の一環で、国の援助機関である国際協力機構（ＪＩＣＡ）から受託する形で実施する研修

活動です。参加する途上国の研修員が、四―六週間の日本滞在期間中に、日本の経済、社会、文化や教育開発に関する講義、学校訪問、授業参観、日本の学校管理者や教員との対話、教育委員会、教員研修センター、その他の教育関係機関への訪問、日本的生活の体験等の多様な活動を通して、日本の教育経験について総合的な理解を深め、帰国後の自らの教育活動の参考にするという研修企画です。

その一環として、平成十四年度に、南アフリカ共和国からの地方教育行政研修員十名に対して、前芸北町立芸北小学校長の尾田由紀子先生に自らの教育者としての経験を語っていただきました。尾田先生の学校には、それ以前にも南アフリカ共和国の研修員と訪ねて授業参観させていただいたことがあり、研修員が日本の農山村地域での教育の取り組みに強い印象を受けるのを目の当たりにしたことから、一度先生にじっくり話をしていただこうということで実現の運びとなりました。当日は、尾田先生にセンターの国際研修室にお出かけいただき、なぜ教職を選んだかに始まり、四十年間の教職人生で得た教育観にいたるまで、逐次の日英通訳を通して約一時間三十分（正味四十五分）話していただきました。先生は、終始淡々と後輩教員に語りかけるといった感じで話されたのですが、研修員たちの反応は、「日本の先生の教育にかける熱意に感動した」、「日本の優れた教育の秘密が分かった」、「南アフリカに来て同僚教員にも話していただきたい」と大好評。質疑応答が一時間を超えるほどでした。

この経験を通して、途上国の教育者に日本の教育開発の経験を理解していただくには、制度、政策、組織に関する学習や関連する視察の機会を提供するだけでは不十分で、実際に教育を行っている教育者の教育観、職業観、人生観について知っていただく必要があることがわかりました。そこで、センターでは日本の教育開発経験に関心を持つ諸外国、特に発展途上国の教育者の理解に役立てるよう、日本の教育者の教育観、職業観、人生観に関する資料を集め、英語に翻訳して一冊の本にまとめるプロジェクトを実施することにしました。しかし、教育者の選択を

どうするか、選んだ方々からの協力をどのように取り付けるか、いかに原稿におとすか等々、課題が多くあり、実施は容易ではありませんでした。また、それらは手間のかかる作業で、センターのスタッフの限られた時間では到底及ばないことも予想できました。

この問題を解決するのにセンターが考えたのは、学生の力を借りることでした。センターの教官が広島大学教育学部で担当していた「国際教育協力論」講座を受講した学部生数名から成る有志グループにプロジェクト・チームを形成してもらい、教官の指導のもとで最終的に原稿を執筆していただく教育者の選択までの実質的な調査作業を行ってもらうというアイデアです。少子化による教員の新規採用予定の減少で、教育学部の学生の間で教職志望者が減る傾向にあると聞いていた折でもあり、このプロジェクトへの参加は学生に教職について真剣に考える機会を提供することになるのではないかとも考えました。幸い数名の学生がこのプロジェクトの趣旨に賛同して、チームに参加することになりました(注)。また、学生グループに指導・助言していただけるよう、玉川栄伸先生（元加計高校校長）に顧問役を引き受けていただくことにしました。

プロジェクト・チームの検討の中から、「広島の校長先生」プロジェクトが生まれました。そこで決まったのは、次の諸点でした。

① プロジェクトで取り上げる対象は、教育者一般でなく、校長先生に絞る。その理由は、日本では通常教員人生の最後に校長となることから、十分な教育経験の集積を期待できること。また、校長職は万国共通に存在するので、歴史、文化、教育環境の異なる国々の教育者との対話を成立させやすいこと。

② 広島の校長先生に絞る。理由は、被爆の地として「ヒロシマ」の名前が世界中に知られていること。

③　原稿執筆をお願いする先生の特定は、候補リストの作成、候補の先生に対するインタビュー、推薦リストの作成の三つのステップを踏んで進めること。

④　はじめに日本語で「広島の校長先生」を冊子にまとめ、それに基づき英語で海外の教育関係者に伝える冊子を作成すること。

⑤　プロジェクトで最終的に目指すことは、「子どものことを一番に考えて、子どものために、環境や人などの困難な状況を乗り越えようと努力している校長先生の姿を伝える」こと。

学生グループにとって最も難しかったのは、やはり校長先生を選ぶことでした。文献調査や大学教官の意見を聞いたりもしましたが、一番大切にしたのは、実際に校長先生を学校に訪ねて、直接話を聞くことでした。訪問には必ず複数の学生が参加、校長先生の話は録音して、後でテープ起こしをして原稿にし、全員で話の内容を共有するようにしました。何回ものグループ討論を重ねた結果、「こんな先生もいるんだな」、「こんなやり方もあるんだ」と思わせる校長先生、自分たちをワクワクさせてくれ、刺激を与えてくれる教育者、教育を変えることができるのは教師自身である、ということを納得させられる指導者、といった「良い校長先生」の複合的なイメージができあがり、それに基づいて学生グループは、この本に含まれている十三名の校長先生を選びました。

十三名の先生は、いずれも広島県内の公立学校の校長職を経験された方々ですが、教員経験、専門教科、教育観、職業観は相互に異なります。教育者としての信念や校長としての指導方針にもそれぞれの先生の個性が現れ、明らかな違いがあります。現役の校長先生も、既に退官された校長先生も含まれています。十三名のうち、小学校の校長経験者が三名、中学校の校長経験者が四名、高校の校長経験者が六名です。女性校長は二名、民間人登用人事に

よる校長が一名です。中には、市町村教育委員会での勤務を長年経験された校長も、その逆に行政職経験のない校長もおられます。

新聞、テレビ、ラジオでも報道されているように、広島の公教育は長い間文部科学省、教育委員会と教職員組合の対立の最前線で揺れてきました。校長先生はその真っ只中で双方の圧力が集中的に掛かる厳しい立場に立つことを余儀なくされてきました。この本に登場される先生もそのような圧力から無縁ではありません。中には、その係わりで自らの教員人生を総括されている先生もおられます。しかし、この本では、個々の校長先生のこの問題やそれに関連する政治的な立場について取り上げる意図はありません。

この本に登場していただく校長先生は、それぞれにユニークな教育者です。先生方に、広島の校長先生を代表していただくわけではありませんし、もちろんこの十三名以外に同様にすばらしい校長先生がおられないわけではありません。その意味で、先生方をひとまとめにして、全体的な傾向について語ることに意味はありません。ただ、十三名全ての校長先生に共通して言えることは、それぞれの教員人生を通して常に生徒・児童のことを最優先に考え、その教育に最善を尽くすという信条とそれを実践する姿勢を堅持してこられたことです。次章以降に展開されるのは、その十三通りの表現です。

注　当初この作業に参加したのは、赤木由佳、岡田杏奈、西住有紀子、平木雅彦、松澤友里、村上友美、亀山史子の七名で、このうち平木、村上、亀山を除く四名に井上奈津子が加わって編集委員会を構成し、出版作業を行った。